



Media Release

ニュージーランド・北海道酪農協力プロジェクト ＜進捗状況の報告＞ 2016年11月1日

フォンテラ社、ニュージーランド政府、ファームエイジ株式会社が出資する「ニュージーランド・北海道酪農協力プロジェクト」は、今年で3年目に入りました。5戸のモニター酪農家はこの夏、農場の生産性と利益を向上させるべく、いくつかの戦略を実施しました。

その主なテーマは、直接的には放牧によって、間接的には牧草サイレージの品質を高めることによって、牧草地の利用効率を上げることです。放牧圧を高めて牧草の質を向上させるため、どの酪農家も牛群を増頭しました。なかには、乾乳牛や未経産牛の放牧を行っている酪農家もあります。しかし、こうした取り組みだけでは夏の牧草の成長を常に管理することはできないため、30 cm以上に伸びた牧草を6~9 cmの長さにまで刈り取り（先端を切り取り）、牛が好まない穂や長くて枯れかけた草を取り除いています。刈り取った草は、翌日の放牧で食べられることもあります。

早い時点で牧草の成長を遅らせようと、5月ではなく4月に放牧を開始した酪農家もありました。成長を遅らせることで、牧草の質をより長く維持することができるのです。

日本の酪農家の多くはサイレージを粗飼料と考えているようですが、ニュージーランドの酪農家は、高品質な補助飼料と捉えています。サイレージの品質向上のため、モニター酪農家は今年3~4回の刈り取りを目指しました。そのためには、穂が出始める前に（およそ40~45 cmで）早めに刈り取る必要があります。サイレージ収量は通常の初回刈り取り量よりも少なくなります。質の向上により穴埋めができます。しかし残念なことに、この夏の北海道は非常に雨が多かったためサイレージの生産が遅れてしまったと酪農家は口を揃えます。その結果、高品質のサイレージを作るには長く伸びすぎてしまいました。2度目の刈り取り時期が遅くなってしまったため、今年中に3度目の刈り取りを行うのは難しいかもしれません。

また、牧草給餌の予算の組み方について学ぶことの重要性も明らかになりました。一日に得られる牧草量を把握できれば、牛の一日の要求量を満たすために必要な補助飼料の量を割り出すことができます。実際、本プロジェクトのいずれのモニター酪農家は、補助飼料（濃厚飼料、混合飼料およびサイレージ）の費用をこの夏大幅に節約することができました。

草地農業（放牧）には技能が必要で、一朝一夕にできることではありません。実践提案を特に問題なく進められた酪農家もいましたが、当然ながら困難に阻まれた酪農家もいました。しかし、草地農業を確立した酪農家らは、このシステムが持続可能であると主張しています。その理由として、補助飼料の費用や動物の衛生管理費の削減、夏季の作業量の低下とそれに伴うライフスタイルの向上、農場利益の増加、牛乳の品質向上を挙げています。今年のディスカッション・グループの10～20戸の酪農家の興味を強く引いた理由は、こうした恩恵を得られる可能性があるという点でした。

経済効果データの最終版は1月に完成予定ですが、ある酪農家はすでに放牧管理の改良により年間利益が300万～400万円増えるという予想を出しています。この酪農家は、牛の放牧中の濃厚飼料を7kgから2～3kgにまで削減しつつ、牛乳の生産量を増加させることができたといいます。この農場の今年一番の変化は、牧草の不均一性が大幅に減少したことです。不均一性は、牛が食べない糞尿の周りや食べきれない余剰の牧草によって生じます。この農場では、牧草の穂が出始めた5月に牧草の刈り取りを始めました。この戦略が牧草の質の急速な低下を遅らせ、牛は、次回の放牧の際に再び伸びてきた牧草を喜んで食べています。酪農家は、放牧地全体の刈り取った牧草が再び成長してきたところを牛が均一に食べてくれるので、牧草地の利用効率が以前より大幅に上がったとも言っています。「各放牧地の刈り取りに1時間もかからないので、全く問題ありません」と述べています。今までよりも細かく牧区分けされたため、放牧地の数が増え、ローテーションでの放牧管理が容易になりました。また、放牧に利用できる土地も広くなりました。日中の放牧地は道路を越えた場所にあり、夜間の放牧地は牛舎の周辺に位置しているため、朝の搾乳時にも牛を容易に集めることができます。放牧地が増えたことで、牛が食べるスピードよりも牧草が早く成長した場合、放牧地からサイレージを生産する際も柔軟に対応できるようになりました。

浜中町の大規模経営体（メガファーム）では、牧場が十分な総資産利益を得られるよう、草地農業へと移行しています。この夏メガファームでは、TMRや濃厚飼料を与えることなく72頭の泌乳後期牛を継続的に放牧しました。「舎内の埃がかなり減りました。牛の健康状態も良くなり、スタッフも牛も恩恵を受けています」と同メガファームは述べています。プロジェクトに参加している酪農家は、プロジェクト開始以来、各自の農場でビジネスとして好ましい影響が現れているのを感じています。

本件に関するお問い合わせ先（日本、海外）：

日本国内

フォンテラジャパン株式会社

北海道プロジェクト担当 諏訪 茂

電話：03 6737 1809